北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

二〇二二年度卒業論文要旨集

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2023-11-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/2000061

二〇二二年度卒業論文要旨集

掲載にあたって

馬場　俊臣

北海道教育大学札幌校言語・社会教育専攻国語教育分野では、三年生から各研究室に所属し、ゼミ活動などを通して卒業研究の指導を受けます。四年生になってからは、卒業論文構想発表会、卒業論文中間発表会を経て、卒業論文を提出します。提出後も、卒業論文要旨を作成し、口頭試問を受けます。

令和四年度は、次の日程で行いました。

構想発表会　五月三十一日（火）　対面・オンライン併用実施
中間発表会　十月十一日（火）　対面・オンライン併用実施
提出　十二月二十八日（水）　教育支援総合システム使用
口頭試問　一月三十一日（火）　オンライン実施

学生は、令和二年からの新型コロナウイルス感染拡大の中、学業に励み、卒業研究に真剣に取り組みました。

学生の卒業研究の成果をここに掲載します。

文末表現としての「的な」について

日本語学研究室　八一二五　三島　峻

本研究の目的は、「私へのはなむけ的な。」といった文における、文末表現としての「的な」の機能を、用例調査に基づき明らかにすることである。

調査では、実際の話し言葉が収録されている『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』、話し言葉に近い性質を持つ「打ち言葉」が一部収録されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『国語研日本語ウェブコーパス』、多くの「打ち言葉」を取得することができる『Twitter』を対象として、文末表現としての「的な」の用例を収集した。

分析では、配慮表現及びポライトネス理論の観点から、文末表現としての「的な」の分類を行った。その結果、配慮表現の中でも、他者に踏み込まれたくなかったり煩わされたくなかったりする際に用いられる「ネガティブ・ポライトネス」の機能を持つ次の二つの機能があることが明らかになった。一つは、攻撃的な発話を意図的に避ける「緩和表現（侵害抑制）」である。もう一つは、話し手と聞き手との認識の不一致を避ける「緩和表現（不一致回避）」である。また、同じくネガティブ・ポライトネスの機能を持つ、自己の能力や資格などに言及せざるを得ない際に自賛を抑制する「謙遜表現（自賛抑制）」の機能もある可能性があることも指摘した。一方で、他者に受け入れられたかったり、よく思われたかったりする際に用いられる「ポジティブ・ポライトネス」の機能を持つ用例も確認できた。

以上より、文末表現としての「的な」の機能には二面性があり、相手への配慮を表す機能と、相手に近づきたいという気持ちを表す機能とを併せ持つことが明らかになった。

テキストマイニングを用いた中学校国語科授業の構想

国語科教育学第二研究室　九一〇一　小笠原　康人

本研究では、テキストマイニングの有用性を調査分析したうえで、中学二年生を対象に「盆土産」の授業を行い、テキストマイニングを用いることで、協働的な学びを実現できるのかを明らかにすることを目的とした。

国語科における ICT の活用場面とテキストマイニングを用いた授業実践を調査分析し、テキストマイニングを用いることで、「学習者の意見を短時間で共有可能であること。」、「スクリーンショットを活用してすぐに学習者に配布が可能であること。」、「単語を頻出順に大きく表示し、品詞ごとに色分けして表示するため、クラス全体の傾向が把握しやすいこと。」、「活動の前後でテキストマイニングを用いることで、学習者の考えの変容を比較しやすいこと。」の四つの特徴を明らかにし、これらの特徴が国語科における、「考えたことを表現・共有する場面」、「学習の見通しをもったり、学習の内容を蓄積したりする場面」、「自分の考えを深める場面」で活用することができると考察した。これらの考察をもとに、中学校で実践を行い、第一時に気になった言動を問い、テキストマイニングを用いることで、生徒に学習の見通しをもたせることができた。また、第五時で象徴について問い、テキストマイニングを用いることで、生徒は活発に対話を行っていた。また、単元の前後でテキストマイニングを用いることで、生徒が読みを深めていることも確認できた。

以上のことから、テキストマイニングを用いることで学習者の興味・関心を引き出し、対話を活発化させることで、協働的な学びを促進させるきっかけとなることが考えられる。

国語科授業におけるルーブリック使用による子どもの自己評価力の変容

――読むことの授業に焦点化して――

国語科教育学第一研究室　九一〇三　吉田　沙羅

本研究の目的は、読むことにおける国語科の授業で自己評価を行う際、ルーブリックを用いることで子どもの自己評価力はどのように変容していくのか調査を行い、自己評価におけるルーブリックの効果を明らかにすることである。

まず、自己評価力を見取る基準を作成した先行研究から自己評価力向上に必要な要素を整理した。その結果、自己評価力を向上させるには質の高い自己評価を行う必要があり、そのためには「どのように考えて」といった学習過程の記述や、授業を通した自身の変容に関する記述がされていることが重要な要素であることが明らかになった。また、学習者がルーブリックを用いた先行研究を整理した結果、次回以降の学習にプラスの影響を与えており、自身の変容を自覚させることができるとわかった。

実際の調査では、「氷山図」と呼ばれるルーブリックを使用した。氷山図使用前の振り返りと使用後の振り返りを単元ごとに比較し、その内容にどのような変容が見られるかを分析した後、その要因を検討した。その結果、氷山図の使用前と使用後を比較すると全体的に自己評価力が向上していることが明らかになった。また、氷山図の使用により振り返りの観点が増え、文章量が増えることで自己評価の質が高くなることもわかった。

今後は、分析結果や課題を踏まえ、より効果的なルーブリックの内容や使用方法を検討していきたい。

読書指導における選書力の検討
――「からだメタ認知」による分析を通して――

国語科教育学第一研究室　九一一一　永井　颯人

本研究の目的は、第一に、読書指導研究における選書力を整理することである。第二に、選書力の「身体知」としての側面について、実態調査を通して明らかにすることである。

まず、先行研究を分析するための枠組みを作成した。それを基に、六つの先行研究の分析、考察を行い、選書力の整理を行った。

その上で、特に、選書における「本を手に取る前の行動や行為」については、「身体知」に関わるものであることを述べ、それが未だ検討されていないことを指摘した。

この課題の検討のため、実態調査を行った。調査は、選書力に関わる一側面を仮説的に見出すものである。論者自身による選書の際の行動や思考、感じ方等を言語化し、それを質的に分析するという手順を踏んだ。

調査の結果、次のことが仮説的に示唆された。一つ目は、〈身体の使い方〉〈ブラウジング〉〈選書の際の振る舞い方〉という、選書力に身体的な側面が提示されたことである。二つ目は、選書の際の〈背表紙・ＮＤＣ（日本十進分類法による分類番号）・サイン〉の活用の有効性である。これは、先行研究で示されていない活用の観点である。三つ目は、〈本や本棚の（多角的多面的な）見方・考え方〉が必要であるというものである。

本研究の成果は、①先行研究における選書力を整理できたこと、②調査より、選書力に関わる研究の基礎といえる右の仮説を立てることができたこと、③国語科教育学研究で「一人称研究」を行えたことである。

読書感想文に代わる学習活動の提案

国語科教育学第二研究室　九一一二　四釜　未鈴

本研究では、読書感想文が抱える問題点を分析し、読書感想文によって育成できる力を養うことができ、かつ、読書感想文が抱える問題点を解消できるような学習活動を提案することを目的とする。

研究方法としては、まず、読書感想文によって育成できる力について、先行論などをもとに調査した。次に、研究協力してくださる中学校の生徒を対象に、読書感想文についてのアンケートを実施し、読書感想文が抱える問題点を明らかにした。そして、それらの内容をもとに読書感想文に代わる学習活動を構想し、授業実践を行った。学習活動は、夏休みに本を読んだ感想をグーグルクラスルームのコメント欄に短く記し、夏休み明けの授業においてスライドを用いて感想を深める、という内容である。

研究の結果、読書感想文によって育成できる力は、「自分が」感じた感想をさらに深めることであると先行論などから考察した。アンケート調査からは、「本に関して自分の感じたことを素直に書くことができない」実態があること、「自分のためではなく、課題のための読書をしてしまうことにつながる」実態にあることの二点が検証された。そして、授業実践の結果、生徒の読書意欲を以前よりも高めることができたこと、授業における目標を、多くの生徒が達成できたと感じることができたこと、読書感想文以上の「行いやすさ」「素直な感想の書きやすさ」の二点について、一定の効果が見られたことの三点が、成果として見られた。

よって、おおむね「読書感想文に代わる学習活動」に近いものを構想でき、実践することができたと結論付ける。

小学校国語科におけるマンガを使った「書くこと」の授業構想
――リレー作文を通して――

国語科教育学第二研究室　九一二一　上原　百加

本研究は、四コママンガを使い、一コマごとに書く人を交代しながら一つの作品を作る「リレー作文」を提案し、これを取り入れた授業を構想、実践しその効果を明らかにすることを目的とした。

今回は小学校六年生を対象とし、二時間構成の単元を現職の先生に実践していただいた。マンガを文章化するという行為は児童にとって初めての経験であったものの、活動中は終始会話が飛び交っており、「書くこと」に対して意欲的に取り組んでいる様子が見られた。また、事後アンケートの結果から「書くこと」への苦手意識が低下したこと、推敲、共有に「書くこと」の良さを見出すことができていることがわかった。

また、児童が書いたワークシートからは、班の他人と相談しながら文章の繋がりを考え書き直したものや、文末を揃えるために書き直したものなどが見られ、マンガを用いた「リレー作文」は推敲、共有に対して有効であることが示された。加えて、児童は班の人たちと一つの作品を作ることや他人の書いた文章の工夫について交流することに「書くこと」の楽しさを見出すことができており、協働的な学びができていたという点でも「リレー作文」は有効であることがわかった。

本研究を通して、マンガを「書くこと」の授業は意欲関心の点で有効であること、「リレー作文」は他の方法でも活用できる可能性があることが明らかになった。今後は四コママンガだけではなく、ストーリーマンガや一話完結型のマンガも扱われていくべきである。

『源氏物語』の現代語訳
――「あはれ」の訳に注目して――

古典文学研究室　九一二八　久保田　雅大

本研究の目的は、『源氏物語』の現代語訳の多様さを、様々な意味を持つ「あはれ」の訳語から、明らかにすることである。本研究では、従来研究されてきた、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴に、林望、角田光代を新たに加え、計六名の現代語訳の比較・分析を行った。

調査の対象となる用例は、『源氏物語』の「あはれ」の用例の中で多く見られた、男性が女性に「あはれ」を向ける場合に限定した。また、調査する範囲については、光源氏の青年期の恋が描かれる巻（「桐壺」～「澪標」）に限った。

分析の結果、作家による「あはれ」の現代語訳の違いを、三つに分類できた。一つ目は、「心から」を独自に加えるなど、加筆によって「あはれ」の訳が強調される場合である。二つ目は、誰が誰に「あはれ」を抱いたのか、「あはれ」の感情によってどのような行動をとるのかという点が異なる場合である。三つ目は、平安時代の「あはれ」と完全に置換可能な現代語がないことから生じた、「愛情」と恋愛的に訳すか、「気の毒」と同情するように訳すかというように、感情の訳出が異なる場合である。そして、こうした現代語訳の違いは、「あはれ」の多義性に由来するだけでなく、各作家が「あとがき」などに示した、現代語訳における方針をも多分に反映した結果であることも明らかにした。

本研究では、「あはれ」の現代語訳の比較によって、現代に流通する『源氏物語』の多様性の一端を明らかにできたといえる。

「許可求め型表現」に関する一考察
――理解主体に着目して――

日本語学研究室　九一三一　東本　咲紀

本研究では、依頼場面における「～してもらってもいいですか？」という「許可求め型表現」に関して、聞き手がどの程度自然な表現だと受け止めているのか調査し、「親疎関係」「上下関係」「負担の程度」「選択権の有無」という四つの条件が、聞き手の「許可求め型表現」の自然度判断にどう影響を及ぼしているのか考察することを目的とする。

四つの条件に基づいた二四種類の依頼場面での「～してもらってもいいですか？」という「許可求め型表現」に対して、「とても自然な言い方だと思う」から「非常に不自然な言い方だと思う」までの、自然度判断を求める五段階評価のアンケートを作成し、大学生を対象として、調査を実施した。調査結果に基づき、統計的手法を用いて分析を行った。

先行研究では、話し手は聞き手に与える負担の程度が大きい場面で「許可求め型表現」の使用を自然だと捉えやすいと指摘されていた。しかし、本研究の調査・分析から、聞き手は話し手から与えられる負担の程度に関しては、「許可求め型表現」の自然度判断に影響を受けないことが分かった。また、聞き手は依頼内容の実行について自分に選択権が無い場面で「許可求め型表現」を使用されると不自然に感じると予想していたが、そのような傾向は見られなかった。さらに、四つの条件以外にも「話し手に依頼されてから当該行為を実施し、完了するまでの時間」や「聞き手にも当該行為を行う必要性や責任が伴う依頼であるかどうか」などの条件も自然度判断に関わっていることが明らかになった。

『夜の寝覚』の女君の父

古典文学研究室　九一三八　長野　一輝

本研究は、『夜の寝覚』の女主人公である女君の父君の新たに見出される役割について述べたものである。従来の『夜の寝覚』の研究では、父娘の関係を、女君の視点でのみ捉える傾向があった。しかし、それを男主人公である男君の視点から捉え直すことで、父君の新たな役割が見えてきた。

まず、先にも触れたが、『夜の寝覚』は女君の視点に立ち、女君が、男女の関係と、親子の葛藤の両方に、悩まされる物語として読まれてきた。そして女君をより苦しめているのは、男女の関係であると考えられている。

女君は、見ず知らずの男君に無理やり迫られ、契りを交わす。そして、後にその男君が、姉の婚約者だと知り、それでもなお迫ってくる男君に、物語を通じて、深く苦悩するのである。母のいない女君にとって、父君は、唯一の親として頼るべき存在である一方、男君との関係という秘密を抱えた彼女にとっては、畏怖の対象ともなり、その狭間で女君は苦悩する。

このように女君の視点から見ると、二つの問題で苦悩しているように読み取れる。しかし、男君の視点に立ち物語を概観することで、男女の関わりによる苦悩の原因が、実は父君にあることが読み取れるのである。男君が女君を苦しめる言動をする背景には、常に父君の影響があったのだ。本研究により、父君という存在は、娘にとっての畏怖の対象となるだけにとどまらず、女君の全ての苦悩のきっかけとなっていることが明確になった。

そうして、物語を通じ、常に女君を苦しめる影響を与え続けるという『夜の寝覚』の父君の役割を新たに読み取ったことで、『夜の寝覚』は、男女の関係すらも包み込む親子の葛藤を表した物語であるという結論に至った。

「えげつない」の意味拡張について

日本語学研究室　九一四〇　梅田　和佳

本研究では、「えげつない」の意味・用法別の経年変化の調査に基づいて近年の使用状況の特徴を明らかにするとともに、変異形の調査等に基づいて今後の使用の広がりの可能性についても検討した。

「えげつない」は、本来、無遠慮や残酷などの感情を伴う否定的意味を持つ。しかし、近年、肯定的意味での使用や程度性の甚だしさのみを示す絶対値的意味での使用が見られる。本研究では、新聞三紙のデータベースとTwitterから用例を収集し、「えげつない」の意味・用法別の経年変化を調査するとともに、「えげつい」などの変異形の調査等も行った。

収集した用例を、意味（否定的意味、肯定的意味、絶対値的意味）及び用法（述語的用法、独立語的用法、副詞的用法、連体修飾語的用法）の違いにより十一種に分類し、意味別、用法別に、経年変化の特徴を見た。その結果、意味に関しては、新聞、Twitterともに、否定的意味の使用率が減少しており共通していた。しかし、絶対値的意味の使用率は両者で異なる結果が得られた。新聞はどの年代でもほぼ否定的意味の使用率が高かった。一方、Twitterは二〇一二年以前は否定的意味の使用率が最も高かったが、二〇一四年以降は否定的意味と絶対値的意味の使用率に大きな差がなかった。用法に関しては、新聞、Twitterともに連体修飾語的用法の使用率が一貫して高く経年変化は見られなかった。

以上のことから、「えげつない」は絶対値的意味での使用が増加していることが分かった。また、Twitterでは変異形での使用が見られ、新しい使い方は今後更なる広がりを見せる可能性がある。

小学生向け絵本における「女ことば」と「男ことば」

日本語学研究室　九一四三　新山　奈那

本研究では、近年若者の間で進んでいるとされる「ことばの中性化」が、現在の小学生向け絵本では、どのように現れているのかを明らかにすることを目的とし、登場キャラクターの言葉遣いの性差及び作者の性差による「女ことば」と「男ことば」の使用の違いについて調査を行った。

調査では、全国学校図書館協議会が選定を行う「えほん50」の最新の二年分（二〇二一年、二〇二二年）のうち、小学生向けに推奨している絵本を対象とし、特に性差が現れやすく、男女それぞれを連想させる機能を持つ自称代名詞と文末形式を調査した。

自称代名詞では、女性的であるとされる「わたし」「あたし」及び男性的であるとされる「ぼく」「おれ」について、女性が「ぼく」「おれ」を使用する例、男性が「わたし」「あたし」を使用する例がなかったことから、性差が縮まっていないことが分かった。文末形式では、絶対的性差があるとされる終助詞「わ」及び「ぞ」について、女性が「ぞ」を使用する例は見られず、男性が「わ」を使用する例はわずか一例であったことから、自称代名詞と同様に、性差が縮まっていないことが明らかになった。作者の性差による「女ことば」と「男ことば」の使用の違いについては、先行研究の小説での調査結果と異なり、登場キャラクターの情報が文字だけでなく絵でも示されているためか、大きな違いはなかった。

以上のことから、近年の小学生向け絵本では、自称代名詞や文末形式には「ことばの中性化」が見られず、作者の性差による「女ことば」と「男ことば」の使用の大きな違いは見られないことが分かった。

リヴォイシング能力を育む国語科の取り立て指導

国語科教育学第一研究室　九一四七　阿部　青葉

本研究では、他者の発言に対してそのまま、もしくは表現を変えて再発話を行うリヴォイシングに注目しており、学習者に対してリヴォイシング技法を習熟させるための授業のあり方を論じることを目的としている。

先行実践の調査を行ったところ、リヴォイシング能力を育むための学習では、学習者へのモデルの提示が大きな要因であることが明らかになった。本研究では、このモデルの提示方法として学習者が正確なリヴォイシングに触れられるようにするため、話し合いの手引きを導入する方法を提案した。話し合いの手引きは先行研究を調査した結果を踏まえ、㈠相手の発言を繰り返す発話例を記載したもの、相手の発言を言い換える発話例を記載したもの、㈢答えが一義に定まる課題に対する話し合いの様子を記載したもの、㈣答えが一義に定まらない課題に対する話し合いの様子を記載したものという四つの手引きを作成した。㈢㈣については、課題の種類に応じて使われるリヴォイシングの傾向が異なるという特徴を踏まえたものを作成した。さらに、これまでの実践では触れられてこなかったリヴォイシング能力の評価基準についても、「目的」「対象」「意味の誤差」「誤差の指摘」「発言の補填」「言い換え力」「わかりやすい表現」の七つの観点から定めたものを提示した。

以上の内容と先行研究が明らかにしてきた学習者のリヴォイシングを起こす授業の工夫を取り入れ、授業例の提案を行った。今後の課題は、作成した授業例を基に指導を実践し、提案した手引きや評価基準が有効であるかを確かめ、学習者の実態に合わせて改良を加えることである。

程度副詞「ちょっと」の使用について
――低程度以外の用法に焦点を当てて――

日本語教育学研究室　九一四八　髙橋　知里

本研究では、少量・低程度ではない意味を表すとされ、「Xは―Aだ」の形の計量構文で用いられる場合の程度副詞「ちょっと」に焦点を当てて、「ちょっと」のもつ意味について明らかにすることを目的とした。

「ちょっと」は一般的に、量の少なさや程度の低さを表すが、肯定的な評価や属性を表す語に付くとき、高い程度を表すとされている。しかし、この場合でも、程度が高いこと、低いことの両方で捉えることができる「ちょっと」や、「程度」の高低では説明することが難しい「ちょっと」がある。このことから、「ちょっと」の意味を「程度」以外で説明できるのではないかと仮定して、実際の用例をコーパスで収集、観察し、その意味を考察した。

実例の分類や、「ちょっと」を「かなり」や「少し」に置き換えるテストなどによって、「ちょっと」が表す程度が、文脈や発言者の意図によることを明らかにした。また、「ちょっと」は、「予想していなかったこと」「期待していたこととは違うこと」を表し、この意味があることで、「ちょっと」が低程度ではないものとして捉えられる可能性を示した。そして、断るときに用いる「ちょっと」などの一部の機能についても、この意味により説明できることを示した。

結論として、先行研究の分類を基に、計量構文における「ちょっと」は、肯定的な評価や属性を表す語と共起する場合、反期待の意味を含み、程度がどのくらいかということは問題にならないことを指摘した。

国語教育者成長史研究
――藤田七花の場合――

国語科教育学第一研究室　九一五〇　藤田　七花

本研究では私、藤田七花を実践主体とし、国語教育者成長史研究を行う。国語教育者成長史研究とは、教師を目指す学生一個人の成長過程に焦点を当てた質的研究で、日々の国語教育実践やそれに伴う変化を事細かく誠実に記録するものである。実践主体は記録をもとに内省・分析・考察を全て一人で行うということが国語教育者成長史研究の特徴である。本研究を通して自身の教育課程での学びや成長、進路選択の過程を具体的かつありのままに記録し、今後の国語科教師教育への示唆を得ることを目的とする。

日々の実践記録を残すために、日記形態でアプリケーションに記録を行い、定期的に指導教員の確認を受けることで客観性を担保した。また、約三ヶ月に一回の頻度で記録の振り返り作業をし、期間中の実践主体の変化についても記録した。また、等至性の概念を用い時間的経過に沿って物事の複線性を表現する複線径路等至性モデリング通称ＴＥＭという手法を用いて分析を進めた。そして、教師になるか否かという実践主体の進路選択に影響を及ぼしたと考えられる環境的要因や出来事などを整理し、ＴＥＭ図として視覚的に表した。分析・考察の結果、実践主体の国語科教師という職業に対する意欲の変容と心情の移り変わり、周囲が及ぼす影響による進路希望の変化を読み取ることができた。

本研究においては、塾講師との進路で迷う一学生の進路選択のプロセスを提示し、大学の教育課程や講義内容、周囲が及ぼす影響によって進路希望が変化する者がいるということが事例として示された。

音楽用語の表記のゆれ

日本語学研究室　九一五一　佐藤　巧茉

本研究の目的は、楽器名を含む音楽用語の表記のゆれの実態と特徴を明らかにすることである。

「音楽用語」「音楽」と名の付く辞典（事典）四十冊を対象として、小学校・中学校の音楽科教科書に掲載されている音楽用語の表記を調査した。調査結果から、表記のゆれとして特に多かったヴァ行とバ行、促音「ッ」の有無、長音符号「ー」の有無について考察を行った。

ヴァ行とバ行のゆれは、ヴァ行を用いた表記が多かった。特に「オクターヴ」の表記は一九九一年に告示された「外来語の表記」を境にヴァ行の表記が多くなっていた。「オクターヴ」以外の同様のゆれがある表記も、ヴァ行での表記がこの年を境に割合が増えていた。促音「ッ」の有無によるゆれは、促音のある表記が多かった。原語の二重子音や短母音と子音のつながりに対して促音を用いる表記が多く見られた。ただし、原語が二重子音であっても促音を用いない表記もあった。また、「クレッシェンド」「デクレッシェンド」の表記は、『教育用音楽用語』や教科書の表記に従ったとしている辞典もあった。長音符号「ー」の有無によるゆれは、「サクソフォーン」「ポーコ」「ポーコ・ア・ポーコ」を除き、長音符号の無い表記が多かった。長音符号がある場合は、原語で長めに発音される強アクセント部分が長音で表記されていた。

音楽用語の表記のゆれにはこのような特徴があり、多くは原音に近づけた表記の結果であった。ただし、辞典の利用者の年齢や慣用に従い、あえて原音から離れた表記にしたものが少数だがあった。

文学作品に対する主観的評価の傾向
――エンディング部分に焦点化して――

国語科教育学第一研究室　九一五二　大越　香織

本研究の目的は、物語作品の結末（【ハッピーエンド】【バッドエンド】）に焦点を置き、児童がどのような物語の結末を好きと感じるかを明らかにすることで、児童が幅広く物語を読むことができるようになることを目指す読書指導への提言を行うことである。

調査は、【ハッピーエンド】【バッドエンド】で終わる物語を、ポジティブとネガティブの極性を持つ単語を用いて自作し、小学校高学年の児童に提示することで、それぞれの結末に対する感想を尋ねた。また、普段の読書で物語の結末に対する特定の好みを持っているかを合わせて調査した。その結果、提示した物語と普段の読書のどちらに対しても【ハッピーエンド】を好む児童が多く、物語の結末に対して好悪の感情を持っていることが分かった。提示した物語の結末に対する好き嫌いについて、【ハッピーエンド】は「結末が【ハッピーエンド】だから」という理由で好まれることが多く、【ハッピーエンド】を好まない児童は、予想通りの展開であったことを理由としていた。また、【バッドエンド】を好む児童は、読後に物語について自分で考えることを好んでいることが明らかになった。

以上から、結末に対する意識を踏まえた読書指導として、児童が「物語は【ハッピーエンド】で終わるものだ」と認識するに至るような読書の偏りが起こり得る環境に児童が置かれている現状を改善することと、物語の楽しみ方の一つとして、読後に物語について考える活動を児童に提案することが、児童の幅広い読書に繋がると考察した。

『今昔物語集』巻二十七の「鬼」の恐怖性

古典文学研究室　九一五八　関山　美里

本研究では、『今昔物語集』巻二十七の「鬼」について、従来指摘されてきたその性質に加え、語りの構造に着目し、他巻の「鬼」や他の怪奇との比較を通してその恐怖性を分析・考察することを目的とした。

まず、集全体で多用される焦点化表現「見レバ」「見ルニ」に着目した。同表現の多くは怪奇現象かつ話の根幹に結びつく場面で用いられ、中でも怪奇を主題とする巻二十七では、怪奇そのものを焦点化する役割を果たす傾向があった。それに対し人を食う「鬼」では、同表現が「鬼」そのものではなく襲撃後の被害の惨状を焦点化することで、人間の惨い結末が具体化され、読者にとって現実性を帯びた恐怖を感じる演出がなされていた。

一方、巻二十七にはそのような構造に当てはまらない「鬼」もいるが、そこには別の語りの構造である、「鬼」登場の予告が確認できた。「鬼」の存在を噂で聞く、または「鬼」の襲撃を予感する登場人物の介在によって、登場が盛り立てられるのである。この語り方には、実際に「鬼」が登場するまでの描写に登場人物の恐怖心が加わり、臨場感が高まる効果があった。

これらに対し、編者によって付けられた評語に関しては、語らないことによる静けさがあった。「鬼」の襲撃を饒舌に語ったあと語り手の口数が減ることで、静寂の中、惨憺たる人間の姿だけが印象付けられるのである。このような喧騒と静寂の対比が、人間の無力さや「鬼」の計り知れない強さを浮かび上がらせ、恐怖を煽る構造になっているのだ。

巻二十七の「鬼」の恐怖性は、そうした語りの構造によって演出されているのである。

コロナ禍を子どもは作文にどう書くか

国語科教育学第一研究室　九一六二　池田　光優

本研究では、子どもたちがコロナ禍を作文にどのように書いているのか仮説を立てることを目的とした。

調査では、小学校の児童が二〇二〇年一月から現在までに書いたコロナ禍での思いが表現されている作文を計一八八編収集し、それらをテキストマイニングソフト「KH Coder3」を用いて分析した。分析は、①誤字脱字を直し、全文をテキスト化する／②単語頻度解析を行い、ことばネットワークに表す／③各作文の最後の三文を分析単位とし、文末表現に着目し、文体に関わるテンス・アスペクト・ヴォイスを踏まえて「過去」「現在」「未来」の三つに分類する／④逆接の接続詞に着目し、その前後の文をポジティブ・ネガティブという感情極性に分類する／⑤特徴的な語について原文参照機能を用いて質的な検討をする／という手順で行った。

分析結果から、「〜てほしい」という相手意識が明確でない要求・希望を表す表現が用いられていることや、逆接の接続詞の前後文に事実的な記述が書かれているものが東日本大震災の作文よりも多いこと、また、指導する教師によって分析結果に差が出ていることや、その傾向が作文指導を行っていた先生方へのインタビューから分かった指導と対応していることが明らかになった。

このことから、子どもたちはコロナ禍を作文に書く際、コロナ禍と自分の行動や感情を結び付けずに書いているという仮説や、子どもたちは教師の指導や場の影響を強く受けて書いているという仮説を立てることができた。

豊かな言語生活者育成のための国語教育
——J-pop 歌詞を教材化する意義——

国語科教育学第二研究室　九一六九　逢坂　健紀

本研究では、身の回りにある音楽の歌詞を国語科の教材にすることで、学習者の興味・関心を引き、言語感覚の育成に役立てることを目指す。また、歌詞を批判的に読んだり、映像から読み取れる情報を言語化したりする活動を通して、読解力の向上と言語化能力の育成を目的とした単元を作成する。

本研究では先行論や歌詞を教材にした授業案を分析し、国語教育の題材となりうる歌詞の条件、中心に据えている言語活動、育成できる能力を分析し、それを踏まえて単元計画を作成する。

先行論の分析では、「流行」だけではなく「不易」という観点に配慮して教材を設定すること、年間指導計画に取り入れられること、評価の観点を明確にして育成させたい学力を明確に示すことが課題だとわかった。

授業案からは、教材をどの範囲まで扱うかという点と、どのような言語活動を設定するかという点を検討する必要があり、教材の意義を慎重に検討しなければならないことが示された。また、言語活動を設定する際には、より多くの活動を取り入れることが大切であり、「書く活動」においては、意見文や批評文等といった「説明的な文章を書く活動」により価値があることがわかった。

本研究では、学習者の興味・関心を引く教材を選定できた点、読解力を向上させられる単元を作れた点で成果は得られた。また、現行の学習指導要領に即した単元計画を作成することができた。

論理的な文章を書くための効果的な段落指導

国語科教育学第二研究室　九一七三　原　一咲

本研究は、児童が論理的な文章を書くための足掛かりとして段落指導に着目し、効果的な指導方法を提案することを目的とする。なお、『小学校学習指導要領　平成二十九年告示』において、段落は第三学年及び第四学年で扱うこととなっていることから、小学校第四学年を対象とした指導案を作成するものとする。研究方法は主に文献調査である。従来の作文指導の変遷や文章構成に関する指導の授業実践を調査・考察し、段落意識を育成する指導について検討する。

先行研究や授業実践の考察の結果、説明スキーマに着目して文章の型の意味を捉えさせたり、論理構成図を書かせたりといったような活動が設定されていた。段落の役割を指導するにあたって、以下の三つの要素に留意して指導案を作成することとした。一つ目は「読むこと」と「書くこと」の関連指導である。二つ目は、論理構成図を用いて思考を視覚化させることである。そして三つ目は、授業の導入に形式段落に着目させる活動を設定することである。

段落指導にあたって、「はじめ-なか-おわり」の型を定着させる指導方法には、子どもが、段落の役割を理解しにくいという問題点があった。その状況を改善するために、本研究では、「読むこと」と「書くこと」の融合、段落相互の関係の視覚化、形式段落の必要性を考えさせるという活動を設定した。段落の作成や読解など、様々な活動から段落の役割を捉えることができるだろう。学年や学校段階が上がっても、段落それぞれの役割を考えて論理性の高い文章を構成することができることが期待される。

芥川龍之介『地獄変』の教材化と学習活動の提案

国語科教育学第二研究室　九一七六　田中　航介

本研究では、芥川龍之介の著作『地獄変』を高等学校国語科の文学教材として活用することの価値を明らかにし、授業で用いるのに最も適している学習活動を提案することを目的とした。また教材研究として『地獄変』の作品研究を行い、物語の結末である登場人物「良秀」の自殺の原因について考察した。

先行研究より、自殺の原因の考察には「良秀」が親としての側面の他に絵師としての側面ももつことが分かった。それを踏まえて本研究では自殺の原因に「良秀」の芸術観が関わっていると考察し分析を進めた。結果、「良秀」の「見た物しか絵に描けない」という芸術観が芸術至上主義に当てはまり、作者である芥川龍之介とも共通していることが分かった。そして地獄変屏風を描くために生きながら地獄を見たことで生じた生と死の矛盾を解消することが自殺の原因だと明らかにした。

学習活動の提案としては、『地獄変』を活用した授業実践例の調査より生徒の主体的な読み深めを行うのが良いと分かったため、調査や模擬試行を通してブレインストーミングの一種であるラウンドロビン法が最も適した活動であると分かった。現行の学習指導要領に即した八時間構成の授業計画を作成し、生徒同士でラウンドロビン法を用い「良秀」の自殺の原因を話し合って探究し、さらに素材となった『宇治拾遺物語』との比較を行う学習活動の提案を行った。

本研究を通して、芥川龍之介『地獄変』の教材化の可能性と教育の質的向上につながる学習活動の提案ができたと考える。

応答発話における「ぜひ」の使用について

日本語教育学研究室　九一八三　菅原　綾乃

本研究では、主にTwitterにおけるリプライ機能を使用した会話をデータとして、応答発話に出現する「ぜひ」を観察し、その用法や出現する理由を明らかにすることを目的とする。

調査では、Twitterの検索機能を使用し、用例を収集した。まず、「ぜひ」の出現位置によって用例を三つに分類し、「ぜひ」に先行する発話の文末表現という観点で三つの分類の比較を行った。①文頭、もしくは文中に「ぜひ」が出現する場合は、先行する発話に「～ませんか」等策動性の弱い誘いかけの表現が出やすく、②「ぜひ」単体で用いられる場合は、「～ましょう」等策動性の強い誘いかけの表現が出やすく、③文末に「ぜひ」が出現する場合は、希望を表す表現が出やすい傾向があるという結果になった。

さらに、「ぜひ」の使用例と「ぜひ」を応答に用いると不自然な例との比較、「ぜひ」を「はい」等の他の表現に置き換えたときの比較、単文では「ぜひ」の使用が不自然であるが、応答発話にすると「ぜひ」の使用の許容度が上がる例の観察を行った。その結果、応答発話における「ぜひ」を自然に使用するには、「話し手が事態の実現を望んでいる」ことが重要であることが明らかになった。これに関わって、話し手自身が「事態の実現を望んでいること」を聞き手に示すために「ぜひ」を使用している可能性があることを指摘した。また、従来は「ぜひ」と具体的方策を示す表現は相容れないとされていたが、応答発話では「ぜひ」と具体的方策が共起する場合があることもわかった。そして、これらを踏まえ、応答発話における「ぜひ」は、応答の慣用的表現になってきている可能性を示唆した。